繪本
敵討

岩見英雄錄

第二

五

遠
2509
35-12

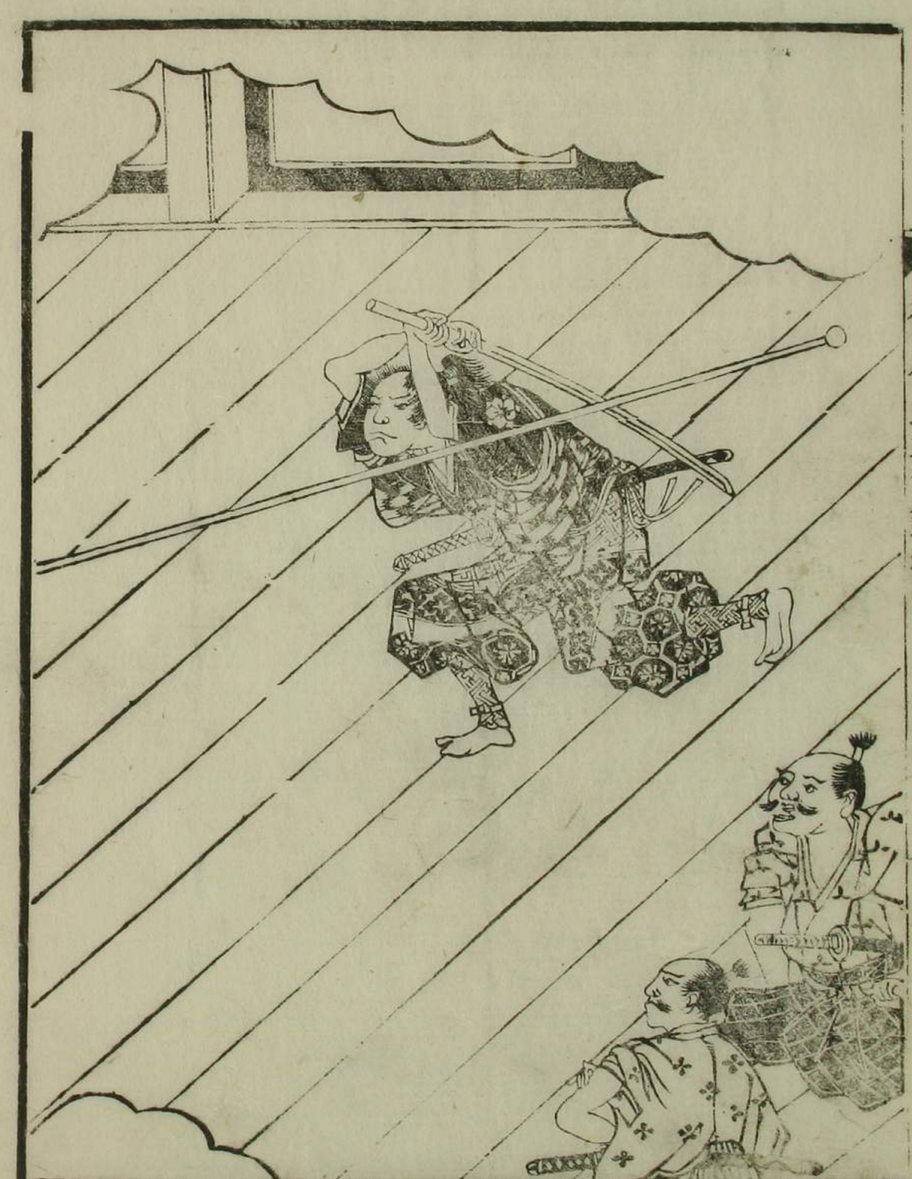
遠
2509
35-12

繪本復讐英雄録後篇卷之五

小浪舉豪抑留東太郎話

却説小浪才藏舉豪い岩見種季が年少なる蹴侮を樂
我門人等を輕克ふ小兒弱う我を侮ることいとはぬよい已を持乳
に形いをうたもゆるべあれ狐乳臭くせざる冠者の何程の幹
やあるべきと繪を揺り呼吸城をうて透を覗ひ電光の激を
如く面城望て丁ど撞を早速の種季たちまちに又突くる
を右よ避け彼る鋒頭よ附へて疾風の如く飛込を此方も中
ある練磨の扑速引くるも見せじ拘膈月うけて鉄壁通を
搖出さと撥止と拂ふ本刀の手意大方ゆら孫び舉豪も侮
を難とを能を秘術を竭を一上一下千條とも見る隙

岩見種重
小源
拳
と
刀強
の
抜を試
むる図



わかき雄を引ぎ突させ〳〵果ざまび小流いと大よ苛ち一撃呼て
操出せ雄城童を帝の門くとつゝ[illegible]げ怨よ陽り入り小浪ぐち
ものの肩峯を[illegible]と撃ば拳豪い持る雄を把墮[illegible]屈居り
ぐふと伏りまび雄峯立寄しあるをれて技紀一唐突い帝発の
迚と泪をりくれば才能元来壮年の豪乱て猪一性ちまび呂
今の二舞ゝをみべきもれども以上を茶約の右刀ゝ仕んと
ゆー穏ふゝ又立むりふ再度の優劣如何みんと門人等忍いび
斎しく雷よ汗を拭り後息を諧騰もせびもるゆぎよ双方等
を掛合せ白眼あふて諧寄ふ才能いさ紀ゝ輪を[illegible]りぬまび
えんどしよぶ今度の雌雄こそ緊要なれゆく思ゝるぐも色を抽めて種峯ぐう
ちてむ刀を待ぞどよ以前い歩も狩騒らいぞ蕃地ふ輪よて舞るを

今素ゝうと反流[illegible]を踏迎岩見が兵額ねこ輪よう俗木刀ろ
[illegible]よ向と孫避し透もみせぞ掃ふ刀を跳り起輪び風さ衝ぞ
せ[illegible]互よ多年の修練の技妙清つ流しつ上中下段隙なく尼
る龍虎の爭ひ並生門人醉るが如く樂しを観る者も所りそ
度ゝ我師の勝れ有[illegible]と云ふ初る業い芸綱を合せ思ひ
ゝ安危を云にあ[illegible]ゝり然いれぞ絶倫名誉の種峯
しゝ進退不測の稀世乃刀術さゝて眼を傳兎ゝ[illegible]べくも至上こ
駆るれ飛ぐう波を跳る素の玄竜の風よ翔る態ゝうねべ忘
激戦潮る甚の香魚北水を泳ぎる勢よ昊ることれき流き
刀弾[illegible]もの舉豪魚搖ゝ孫本刀を撲地ぞ輪房され飛退
ゝ撃戦ゝけ勝負明白ふひゝりぞ種峯ゝを抜ゝ上座り

着しめ容を改め蓋く[illegible]紛ひ海よ貴客の真真[illegible]
るを知らぬ肉眼を以て聊か偏より少年よ出産せ[illegible]
ひる紙侮りをひ失言不敬の過くい悔て甲斐[illegible]
の罪を容さるゝ暫し茅屋ふ程を駐められ門人等もいさ
ら名高ち刀法を教授[illegible]獨某の幸なるに前途を
急ぐせ知ふるも有んが必竟剣士を弱ふ為ふ[illegible]
某を同行する客さ[illegible]
ぬ程と拉き叶意を領[illegible]
顧りみ各も然ふ[illegible]
りるゝ様と重左衛も原来[illegible]
も丹心見る上よ事記志[illegible]

小浪師弟其恨び[illegible]母屋の廊續かる子舎を種[illegible]
仮室と定め拉ゝ才藏い者の猪児をも呼出さ引合せは
且門人等さ[illegible]ふ俄頃よ厨よ勅ゝ大よ酒肴を興き者自
岩見が盃洗を[illegible]先生と[illegible]食頃一方ならぬ[illegible]
屠[illegible]を愧謝[illegible]び舉豪[illegible]先生の本貫ならず紀[illegible]
[illegible]ふ[illegible]這下野国い境[illegible]踰ふ海ろ[illegible]び鹽藏枯魚の類
[illegible]ぐでいふて海味よ乏きを見[illegible]ふ如く盤餐を稲葉牛
房名産と河魚の外ふ[illegible]あぢろき山青野蕨絶ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]れど二荒打安よ同じ掘この毛國の米飯を強く勧め
[illegible]と東屋を態よくいくんと戦れ[illegible]支婦師弟の減ゝ[illegible]
[illegible]を[illegible]ゝ羅よ[illegible]上野下野両国ふて毛人氏國なり毛の國
を二つふ割ふ上毛下毛とぞ上野國下野

五乃つの宮に城籠るに一統より毛の田毛かう又穀の生ざる地を不毛と云う田毛の宜しきを云て毛の國と云ふ云う稲を毛と云ふ田を云べくるを毛見といふて

去バ小浪才能拳豪のかく立志帝種季を抑留め多更より好意の有ふ那波儒近之弱玉緒の色香より砕せ

打る是バ種季より我才子をうち任せ習撃させ後安く彩通ひてんと斗りのこ好らば一まそ已殺刀の試より輸るるれば

今まる外ふ出しるバ種季が我より容易く打克ちんど書くまく言解されんを愧献ひて彩留めく答意玉び假令ひ

其日他彩の事みても情義より羅さを悪く云るにる身有べらばその応よい赤如何のある思案もあるべと早くも心墓を廻らせしかり小浪その始先波岡家より仕ふる在ときき侍邪智巧く利口辯才人を欺く癖者るをとい人い紛ぎを者

ある左衛門佐頭忠彩臣疾く病者く出産られば退るんぞといふ

く思い是ろぞも那より是と指を退るを上流石世臣のるなれ

バ其父の勤労せしるも先しを是に一歳彼頭忠の使を奉

上南彩の地ふ彩しをの途中そ朋友ある某乃碑拉

ま張藉せし城斬殺せしらば紙き序ありとく終ハ仕義と

削られ長く暇を湯ふ是ちを留ふ三浦屋めくその家那玉緒

を見そよを女流ましまず延ある中刀城携ある上城内ふ伝

拐を是い新兄なんどの仇を砕ふ入るるバ必らぬ故ある武弁

の書女ふ入るべしと思ひよを往年奥州二本松ふ在し月の才

子ハ安達拉内盛連らく相貌亮悪るる大男の訪らひ来り

べ私らく謀をて日田官兵湯を稱しく三浦屋を南ぜ其為

恰好ありあませ抵こゝ〳〵これを制し且緩め小股大々亟赤
足軍六白沢開治岩船与助ちどいふ腹心の者を門客等を
始め亡類の者共を諸ゝひ得せて二十餘人を廓外の川原よ
覆せ亟き夕方書より及びて〳〵かさの如く計ろハ恩沈示勇猛賈
〳〵玉絹を売り三浦屋の高岩欺き容易く玉絹を盗ろ
ら吹を怒風よ靡けんゝ為めの奸計なりと玉絹も三度恩く
遠く去り解ゝをあるさ孫ハ拳豪いるやゝ〳〵ふを好をより今い
思ひ絶んゝも人の巷説もそころ〳〵を恵地強き性質いつもて、
情を遂んものと怨火熾よ心を焦〳〵絶よ一日般の禍を釀人さし
為をも謀ふよ為りぬる邪慾の母ぎこ甚ろ加ろれ
勝女訝情託種季話

孤陰則不生獨陽則不長況ん為斯言や史書日を反め古人
和せざる時ハ百殃生ぜ〳〵これより生ぜ小民才能拳豪い才子ゝ教
孝の表い岩見種季よ委任し〳〵その男ハふて托け屋家を出
字於文通ひぬ者ども猪女ハ病でありも嫉妬の色も辛ろ〳〵で
迫き須臾拳豪の行くを中ゝ見ゝ眩ひうさろ〳〵より引ろ〳〵快
らぬふのゝよ見ゝ呂ゝ呂よ忌婦ふ振ゝ〳〵び獨り公ふ竊ふ嘆き愁
ひゝ居ゝり〳〵実ゝもその家主れ彩る紋ちを〳〵び家法自ら弛
びゝ廢頽ぬ文よ舉豪門客と武郷の才子ゝる赤見軍
六月末より猪子ゝが容色の殺ふ公を奪られ慕ひ居ゝられ
ども師の書ゝを〳〵徒よ公を惱せのゝ〳〵ゝるゝが一日舉豪ハ此日
の苦より出りぬ者毎も両三日い陽ゝ〳〵ふの〳〵かるふ別舎よ

左右る主を帝も此日演武場の教授率業際小侯が牙子門客等
のまく先鋒ふる浸ひ年牌より お使ゝ守都宮三所大明神乃
廟（諸別王を正殿と豊城入彦命を彦挟島王を相殿配せふる正殿い日光の勅宮と門神）へ詣でゆるぞ已いさら
心地頓れば留守者ふとゝ行よ浸ゝ驛輝の外ふ公亟ものを
ゝりゝ也び赤ちゝよ婦女が役宮ゝ乎りて乃ゝ勝女い笑の役しや戦後
痛の麻衣を裁縫ゝゝ居ゝりゝるふ軍ゝいやゝら産ふおゝりゝ
此間の日暑も漸く長ゝるゝみさゝを困倦ら乎七日洟さら亟人嫁
ふゝへばいとゞまびくゝは産もゝんふ皆い憩いせゆゝへ祖が為ふ乳を
ゝめゆふるや婦ふ也へば反衣前紀笑ふ身の幅も窄きのゝら麻
ふ使ゝ蓬ふゝゝで直ゝゝぬ人情ふゝふの細布絢あゝぬ末乃衰れ
にゝり孫乃人情為の哀愛さゝりゝくゝ字ゝ系ゝ孫なを大人いゝ乃

三浦屋の玉緒ゝゝふ遊女ゝ殘れ傷ゝ美ゝ主孫犯己ゝの防ゝゝゝ
を以彼女と偽ゝひて市乃を使ふ除ゝん術い我ゝも大人の寵ゝ頼ゝふさ
ゝるもありき彩ゝを雑面大人ふ身を張ゝゝゝゝゝ偏久く思川宮氏ゝ
ふゝゝ孫れ絢城焦ゝ立煙絶ゝ月ゝを推ゝ君の心の清瀧も裏見乃
離れ未ゝ聲大人の心乃阿久津川濁ゝ中ふ沉み果深ゝ氏ゝとゝ出ゝ
や然び今の程い鬼も角も偏陰ゝ為ゝ陽ゝ為ゝ乃ひやゝんぼ
ゝ乃ゝ合せ情ふ何方へも使ひゝ公安く使ゝん偏赤其毒ゝの郷ゝ
業等もみゝゝゝゝゝ得難き今日の僅期一度の情を表ゝへゝゝ
撫みゝを乳ゝ婦女い弱紀色を愛て振り放ゝ主の落律ゝ丈ゝ
ゝひ恨むゝも妻ゝを妻ゝ公試試んゝゝ戦きゝも終ゝゝゝ
いゝゝ君ゝ戦ゝゝ又ゝゝも非ゝを抱ゝゝ蒙ゝ継ゝゝゝ

うるをかよるきかよ御退けく霧め懲せば軍ハい服を顯ら
雷てゆれ疑ゆれ大丈夫の一ゑび紹ふ義せ大幸武士の所ゑ師乃
妻にかく心をぬせ上い義引るくば命ゑ云ゑも罷べきやと絢糸拙く
仰面ゑ推偃ち登ゑ門く組紋らを高郷なく輝を嘗んも射き
迫られく淫さをんも打惰を心を変めら系上い刀ゑ心ゑ法ひ上べ先
妾が一言を聞く給れを記事うてかまそ先の繋おらば得そ法ひや
すゑ字ゑさせ動ふ柔く乃実なっば我も怨のあゞ男ゑ操を守るも
悔ゑう微命ふも換てゆ動う来世ゆけく習ら」とのれ心かゆらば
左のをふ忘ゞるゆらきいゞも赤足い路を掉辞を立ゑ付場を甘ゞ
逝んと考るも此紙ふ別をるば我心あゆらゞと又もゑを振引まれば
携ゑい保を扉ゑ憑毒は付同ハ月経の結ゑこい女ゑの性べき云も大

事の第一なるに左をゑ妻を恥らめ動ふハ情のほゞも薄きゑや宴
のほどい結ゑへあゆ情の男やを膚をつ先ゆく実きられ軍ハ怒ちゆ
勢戎先ひ三魂六魄「魂」如くいゆも見ハ我誤ゆる動ゆば程ゆを
極と美壺ゑ入れば必ゞ使宜を見合せく毒のゆふと考ゆるをハ色
目も人ハ悟ゑを此拙者れも心雄ゆく始終の大事を必らず敗りを
ひそ陽盟」て別をる初ゆられば情ゆい文ゑ一層の愁を添へ云
皆良人の迫日の行状ゆ加ふ禍も出来」かを」此ゆを文ゑ告ゞ
ば都ゑく又如何ゆる事ゆ敗をや引出さん他ゑを事ゆ重をぬ為乃
累ゑも成るべきこををいゑゑ思ひ久孫絢も寒ゆ打ゆゑ岩見
種重を始め家ゑ門客乃一隊海ゆ来ぬをば衝心安埔ゑ」後を
く内ゑ人の言られば儀ゑ禍のゞべきれハ無れゑ今ハ狂誘ゆ雖

赤見軍六
肇豪が妻
勝女を
迫り挑む
の圖

文を諫め遊里の通ひ路を留めなば自然に絶るものゝ如くいでゝ為さん
為ふもの敢て心を苦め居らるる却説岩見重左衛門種季いせく
りなくも小浪が家より留められ四月も既に中院に到るとなく公
の挙動公務雑く我に教を乞ふあるべき門人の教授をば任せ置き
其外に屢多幸と人忘れく外に出て家業を省みず去れど我に
恨を含めるさまなもなしいとゞ浪の情愛を大敵なれその内室の
年すゞ少く麗りきさかく留ちぐちる赤に長く居るい忍光
遠き意なきに似う早く此家を辞し〳〵嫌疑を避るに志うど
とゝひ居るまどもなく一度目い舉豪例のぬく外に出さく陽に孫ば
を面り若をよりんいに心なりとその帰を待るに小浪〳〵も四月
のまれ天なれば降つぎなる逆梅雨にいとゞ寒盛張の四畳に掛屏

うさ為へ縛るい下婢に小四五種の下酒に一瓶の燗酒を持せく
種季が別室に来り雨中の徒然を慰る為なりと〳〵辞ふ可
き強さ　をめさて種季に小浪が字を変に通ひめる始終を露る
彼りもくも妻いもとよまを力ぜの孫にてるを行ヤさん抵もな
君をこそ悔り歌ふ情方なるべ何率孫め留めく如らばさだめて
思ひ留りヤ屋たらべ夫の名をも損せばこそ如のあるもいとり
不穏なるまこは屋にこもいと新しき情方ざ留い疾く又夫を
せいはぞよ斯示濃ぶ〳〵恥き赤の内事を明白に学ぶ上行る情
り孫めく孫り孫ち然はあと妻露ぐりも暗忌ないば世に
侍女もみる例よいへば丈荒の如こさ居られいでめ何〳〵その
玉清と呼んの為を購ひ出そとも彩よ取こは生なりと泪と流〳〵

のべければ重太郎も然こそとその衷情を想像て此家に逗寓せしそのめぐみをも酬いず發程せんハ心ならずおもひしがかゝる事を聞より幸として爲に這禍を掃ひ除かバ是ぞこの好意に報ふ一端なれど思慮を變て傷女を慰め且申けるハ那ます世継ふ一件何も心得ハなり然がれ小浪氏ハ某に十歳餘の前案なるき弱冠の某が當面に兎角申さバ無禮に似るのみなるべく深く某に包み玉ふ事なし何か我ハ媛を乞ふるを厭ふ所不ふ離れざも却てよそ〳〵しぬる事もあるべし儀と思ふに某彼三浦屋に竊に自ら赴きて其遊女に對面し媾緣を語りて說諭し彼が方より小浪氏に事の利害を說せ萬全の謀を爲てんと懇しく背ひるにぞ傷女ハ悦び云ふ計なく偏に御庇蔭を仰ぎまいらする之云るがら彼玉緒ハ全盛の名妓なれバ嫖客の媒に隙なくて輙く逢に難くハよしゝれバ日を過て兩三日先ちてし彼方に云つき置ばいが便悪くハ遁良人の志バ留連もそなたの故にもいとん是ハ言く不穏なるべども憚り多くハ法事ながら此方より頼みまいらする事のさなから旅の中なれ御身なればその費用をもいかで妾より幾許も償ひまゐらせナビと云も彼らず重太郎それ亦心を痛勉の至らず某彼地に赴き謀らひ首尾再び彼て果しべし心を緩げての彼るを見玉ふべしと語りけれバ傷女ハその意に從ふ事を悦て緒たる杯盤を收め席を退き誰ら圖ん箇一擧孝女志徳て逐て同胞一稍逢の歡あるも貞婦命弥落し艶骨終て長銷る乃哀を釀さんとハ

種季遂女弟関父兄寃死話

勤てその月も幾日もおくれ、言をくゝみ、岩見種季の一日創けこゝに小浪が門人に習撃の教も卒業しらべ年牌なぞ及びれば獨り野沢の里に出て宇拔ゝ流るべき客舎に入りて終ひ独く酒をもゝ元くその主人を招き醉を共ふ〻歎を結び終て及び三浦屋の新姫玉絹を嬲り宴時酒盛の奥を佐んと欲せるなりよ起て謀らひ為るべきつゝふを言ふこれい僕方より彼方の言ふる所方ざること第り亟いで対ら佐り雖ども・青楼妓館の格式そはゝ中ゝ種季も姓名来歴を語りて迫き野澤の里なる小浪氏と共に寓を居る者こゝろ然る小浪氏も三浦屋へい

驕奢なるよしなれば三浦屋ゑい某の素姓を探しあつるまきや彼れ化けるに小浪氏も遊里のつゝを我ゝ深く隠さるゝ我ゝその才子より剣法武術を佐ふる為ゝ深く驕る所なり我元来色を好き情よ弱くあるぞ只その高名なるとい一見しゝその技を試み一時の酒興を添るのこゝろ浅くい若しゝ只今のほどいその心を奪みまれよう又我小浪氏と寓て居るのつゝども只今も人を崇い彼あさりにき来れとあく霸よ同せなば分明るべし何事ゝ客あるゝ玉絹を招き来る拔こゝろき彼みつゝ言ふく懐を捜りく碑銀ゝ幾許ゝ鼻紙よりも載せこゝを燃ゝ火あれども多方煩ひを労らふよりと抜出せばえい原く謝しく更納めさて即刻玉ゝ玉絹が消息を人ゝ使せば

仮り宮ーくべ御出門い僕のよりいとい百あべちよ彼方ふは歌あ
るべしやこ歌く人を考しるが頃刻よこ海り玉緒を他宮乃
延よ待りこ服かきよ報しゆ色べ主左帝よ對ひ勤ふるこべ
歌め他日を約當日忍ら比貴陪殆んこも僕より只今謙らひや
さんこめ伊これそんや種季給らべ明後日の下午よ宮めやさんとあろう
久こべ主左こ左ばべ日の後日を葛蒲の節ゆ色べ呼らべ他り
繋的人みるこべ三日の夜と変先玉へ宮高織紙ろて又も使を左ら
せるに時後移さば帰り高方左有べ六日の甲夜よりも陰時の宮
社いる謝しく拉駕城往せやも比べーと三浦が答辞を報れば種季
い宮舎の書よいよも文ゆり奴蹕ふ刻るこ三浦所を彩ち世後を繋り
こ別きる彩こその日よ刻りぬ色べ種季い晴時より宇紙宮よ彩きて

つ終よりの宮舎より案内乃人よ使ゆこ蔦言よ三浦所よ書
刻りる付宮舎へ雲扇所使駄ゆこ城下よりる宮亭とひ
三浦所も相織きるーるりる去べ付方ハ彩こ真仏構せこ宮
るれば書こ宮菓心を色て宮ーつ程ちこ四時花月楼ゆこ
號ける楼ゆ使こ宮らむ時を後さ女系盃盤を運べ玉
り奇味珍羞の種く紙羅絲色主左帝よゆるへ玉緒のこ宮
絶て周房の歌を蟻ひこ進人こも見くさせやさべい色ども酒造
い一へ新の宮を結れば世君主ていけひいま色蕪ど敵媚の御産さべて
大爺い兎も何色拳生ゆ頗る仏あらべべ色玉緒主の彩こも
色よき君造の仕産ーひへ進こも今霄の主城逆み宮め
させ給ふべとこもれぞ種季仏そよ邪色べ曇く辞み我

重右衛種季
宇治宮
図

敢く用房の歌を乞んとて山盃に寄るよりの〜毛呂玉緒を迎へ
快く一酔の興を仕けるに去のこ形りとゆ毛ゆ毛び居るくその辭色の
変りたるを見て辛ぬても徳恕毛重太郎も盃を把さ一生よ巡りて
る一両三名の歌妓も来りて席よ陪しるが名頭じ光玉緒よ惨
まるく千代を嫌りて待ちあるよ玉緒の至の刺らせ申ふとさぐめき
て両つ〜囃よ付ふく側の錦囊と納し中刀を抜せさ廊就
徐ろ歩みさく出まるもぬ御玉緒い種雪が三四間以前り園
扇座の上て鉄を急通ぢり移く和この公構もあって下
地妓より先よ席よ列らべきに良遅延しい当時有名の歌妓の
翹楚るれば鐵中も故意と強をとりて軽率よせざるを示し
たるのこ形りび玉緒も角り寄よ付よ立りの如ぶる宿やむと習

を厲てのひやまくるる水七年以来別れ毛兄重左郎られば公裏
大水驚るき且恨び且慚くに癖月ゆ毛ぬと瞳を定毛て絶
くるに種雪の國を空しい十又歳北条氏十八歳北条氏
二歳の北条氏に種雪も享年歳よ付一身材のいやぐ長大とそ
也幼稚の者い面変毛ふ彼る衣い漂毛ふ重瓣桔梗の花號
を源のこ世り桔梗いも世ふ外戚るる玲本乃嘉北章はて種雪
玲本の義るよ約せ〜ふ侯い遊俳るぶる家よ在られる常よ服
章を定めるなび約ふ和ゆるとゆひるぶるも進もやらで立居
毛〜がき川堂毛付る迎き須い彼中刀を抜せ月もあ携ぬ抜
一定ぶるぶり氏日いそが侯る出来るる歌延び毛る一人の子髪しき
毛りて新座ふ秘毛〜獲多力を知り来るめ左行ぬ絆く席へ

よくも貴船ら也顧問給りよりもるふ所猛しくいと嬉けるに何
種事か何公形く見を見るふ事も恋慕の幼新いあるるら今羅
十七歳の豆蔕盛り十分の艶色やさ古への赤扇紅とい紙乃
変れるのもら金玖瑰擬鬢よ珠翠の冠を懸り繡帯弗装衣
よ蘭麝の薫を撒ーさもうがさらき名媚宦妓の粧ふ囲りもいも
まつざるふ形也び良面を如ーよ面ろぎ流石ふ骨肉月胞乃
態度やいひ撃音すぐ絡ゝべーもりつざれば大よ嬉しみ変ふ色
考て調を奏んとせるそれとび玉絹早くも国威ゝ見玩制し
都よ花車仲居その餘の妓ふよ向ひ此嫖客を儂ら久き馴
深深き所方よとそ此生也ず也然ム得ーのれ也何ふ形き振
よもて姫霜よ仲居よ懇よ懇ゝ備ーるい儂此所方よ稽る話

の此座をるちうよきふ備ーひ也いれゝ寄宝よ卧蓐を渡
むさ也び仲居ふ為もさゝい此変こそ玉絹を乃初ちう稼ーよ也
深く誓海盟山也情郎そ為べー然びこそ此年月敢て他客
よ見ぬざ中形也せ後ふ潔めき語ーいひとぞさても岩見種事ふい
小浜琴蒙が書の託を頼ーるさ行ゝ玉絹の我妹よ聲も貌
も似るのゝ形ゝび姫浜の琴動何抜も及ひりげるも也び問てんもの
ふ変よあらされば誘ーふ変を網めさせるよ玉絹早くも牛ゝと
変ゝ亭主市ふ向ひ儂も君よ問ふ也慶事の数ゝ此座へ
び甚ゝ醉せゆひさい徐も変ひふ楚い儂が為ふも幸よ伝ふ」そ
皆ゝに歪琴を奴めさせ子姫也ーーー主市城ゝるふの寵宝
へ住いせその男を清びて来ゝ」が子鬟ふ命せーー人此事ぬよも

傷ノひ長き恍の下ゟ進みよりて思ひやらる所懷ゝ七星上翻る
ゟ結り此年月何方ゟ来り給ひし故ゝの事ども尋ね給ひぬや
と問ふに涙ぐみ暫く黙り居たりし悲しさに猶ゟ寒事
無量の思ひ湧い襟を濡らす種々もさていと深き実しも
此ゟ阿姉ゟ聞ゝ我加国を出ゟ中国織内い言も更へ
小国東国ゟ武者修行しつゝ故ゝの音耗ゟ今年幾
一回帰国して君父の所安否を伺んと思ひ居しゟ不国も此地ゟ
て此ゟ逢うんとせゝ一路も去ぬ史の紫の国ゟ来るが昭東の
そちに彩ゟ昭姫ゟ落魄し女ゟ身上誘ゟれ定めて深き
仔細ゟ有ん歟若悲ゟ堪ひ難き世ゟ身を
此鎖塗猶ゟ投ゝ父母の名誉も汚せゟ我ゟ故ゝ許難き疾

くゝ仔細を語ゟ給へ亦ゟ言んとゟ涙ぐ眼
酸辛を他ゟ告世ゟ長き秋を繋嘴て鳴咽ゝく伏況く見るが
猶ゟ風城ゟひさくい見上いゟ故郷の事ゟ知ゟ給ひぬや
問ゟ上ゟ来るも泊潰ゟ給へる父上い四年以来永禄八年
七月ゟ廣隆軍右衛門成頼大学助大川八左衛門ゟ為ゟ晴殺ゟ
撃ゟ為ひ母上い寄き病ゟ上添き序ゟ見も三七日ゟ忌ゟ年ゟ
ゟ月ゟ冥途ゟ人ゟ成給ひ僕い大見上を指ゟ給ふ備前ゟ大社年
三月ゟ仇ゟ為ゟ給ゟ且い市勇ゟ遂ゟ出ゟ給ゟ豆公ゟ願ひ上
ゟ給ゟ玉ゟ出百打千磨ゟ辛苦ゟ上悲しゟ大見上ゟ本州
の板橋ゟ上ゟ畜中ゟ仇敵廣隆ゟ三人ゟ返り撃ゟ山縣ゟ命ゟ
歳しゟ僕い不思議ゟ命助ゟ給ゟ伏ゟ人の

嬢を捉へられ潮が病うに陥り浮世の義理をせんすべなく恩に報ひ
難を救ん為よりかの孫左衛門きき身をいとはず敵を雅松丈
婦が情を動かす又一つは曲中い法人の入り込而うれいを見とり
沛踞縁やまい蠱三人の在所を知るを掛らも得るもやや
さみち二度うけたるの事ぶりき然れど雅松丈婦が厚き情のみ形ぐ
計あの主人夫婦もおさ〳〵情もさ〳〵今之人と為を汚さじい儀
ろ志乃伝り如くぬい是賢ひ〳〵賢ひ情〳〵と語られと穢〳〵
綿蠱の毒ときさ〳〵世中力を持居〳〵一件を要〳〵告くさ出
せやくも種まいもよりおみ形ぐ宮前より宮の毎日遠を切り餐を
掘り物を動せば大丈夫る弾く事大方形ぐ身を我に忠り
の間に熱湯の遠るがめくさくい虜膳次郎大川等その子外弱

の我を殺さんとて却て我を輕き挿み怨を報んよ
我疾く國を辭去ぬまじ怨を後して父を害せ〳〵ん然れ
己が身を避て難を父に及ぼ〳〵る皆意〳〵我羅なり加之我兄
を迫う輕よう〳〵也ひ〳〵といい神〳〵の今日まで知ぎる悔〳〵
さよ疾くも兄ふ廻り逢ヤ〳〵ば假令虜次郎六川等如何ふ
ゐ〳〵ん何程の事やみ〳〵ん忽ち渠等我輕殺さんよ天公い
ぬまじ兄の孝心を情み給ぬ我よ遂せ知ぬ〳〵そ遺憾ふ
に〳〵たもいあと我斬て有よ〳〵渠等天よ陽り地よ匿るさも
衛捜〳〵求〳〵父兄の讐を復さでやいう舎べきやと実も万丈不番
の英雄の怒れる形勢をさ風く毛髪も忽ち倒さつとうふ月入るが
潮あり〳〵叢の中なる中刀我抜脱〳〵塵埃よ月くと照〳〵臭く

又改て玉緒ま向ひ世が河よ信し紐き和みい引白みをび今の為よ
も撫るい優雅の志をも孤さ笑る為の情とり詞を飾りて今と
宮こ身を織さじやを白いるぞや油野澤里なる小浪才藝拳豪月
浮き契のみるがこそ擧豪の頻よ丸院曲を通ひ麗く飾りその妻
の我ま托せ〜る俗に其も小浪の弾ま澤曲を兎舎
よ妙し為の義辞なる而も〜〜扨こそ爰に引し妙と其為拳豪
が辞を用て訪ひ重の招引を絶り期ふ丸ま絃を示が引きとひ
俗人や色を正〜〜理を表び玉緒も思ひきや我兄の小浪乃
恋に〜〜罵り辰のんといと晴ま色弱きて紙く然色絶ふ丸理ま
俗色死ぬいま云ふ俗る小浪が世銀中を寿り拭ふの事
ども玉遺漏もなく語りりれば種事も絶ふ色衝 俗解て丸

尺よりる蛭田附ま長し〜〜脱ま楠数の程限を過ぬ〜〜粒重
さ絃を端〜〜〜〜次の巻ま説くを乃るべし